

有機農業の地域的展開に関する実証的研究
-埼玉県比企郡小川町を事例として-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-11-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小口, 広太 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19709

有機農業の地域的展開に関する実証的研究—埼玉県比企郡小川町を事例として—

学位請求者
農業経済学専攻 小口広太

1. 本研究の問題意識と目的

日本における有機農業の取り組みは、草の根レベルで地道に社会的な広がりをつくり、有機農業推進法（以下、「推進法」）の成立によって官民一体で有機農業の振興に取り組んでいく体制が整備された。そのなかで最も重要な焦点は、市町村レベルにおける有機農業の推進である。

既存研究を整理すると、有機農業が提携を軸にしながら新しい社会経済システムの構築に向けて展開している意義と到達点が示される一方で、その実践の舞台である地域ではコンフリクトが生じ、生産の現場を支える提携というシステムもまた大きな岐路に立たされ、課題を抱えていることが明らかとなった。

本研究では、そのような成果と課題を踏まえ、埼玉県比企郡小川町における取り組みを事例として取り上げ、有機農業の展開過程とその展開要因、および意義を検討する。

本研究の課題は、次の3点である。

第一の課題は、地域における有機農業の展開過程についてである。小川町では、たった一人の実践から有機農業の取り組みが始まり、地域的な広がりを形成していった。先駆者である霜里農場代表・金子美登（以下、「金子」）の姿勢やむらとの関係性、地域への視点に着目しながら、小川町有機農業の展開過程とその規定要因を明らかにする。

第二の課題は、有機農業の担い手の形成と展開についてである。小川町では新規参入と転換参入の取り組みが広がり、なおかつ多様な経営形態が存在している。有機農業者の多様性という視点を設定し、事例分析をつうじてその定着要因と展開方向を明らかにする。

第三の課題は、有機農産物の流通の形成と展開についてである。小川町では、町内および周辺地域の加工・流通業者への出荷、さらにNPOと協働しながら販路を開拓する動きが展開している。そのようなローカル・フードシステム（以下、「LFS」）の実践に着目し、事例分析をつうじてその定着要因と展開方向を明らかにする。

2. 各章の要約

第2章「小川町における有機農業の展開過程とその特徴」では、小川町における有機農業の取り組みを「胎動期」「成立期」「展開期」「充実期」という4つの時期に区分しながら分析し、その特徴を明らかにした。

小川町では、霜里農場を起点に新規参入、転換参入による担い手が徐々に形成され、さらに地場加工業やNPO、行政などの多様な主体との連携も同時に進展するなか、段階的かつ緩やかに地域のなかで有機農業の広がりが形成されている。

第3章「霜里農場の実践と考え方」では、小川町有機農業の先駆者である霜里農場の実践について検討した。

霜里農場は暮らしの自立に向けて着々と歩みを進めていると同時に、地域に根差した農業経営を展開し、さらに研修生の受け入れによって、有機農業の広がりをつくるきっかけとなった。その一方で、金子がむらの中で対立的な関係をつくらぬよう、「一農家」として過ごしてきたことを明らかにした。

第4章「有機農業者の実態と特質」では、小川町有機農業の大きな流れを形成している新規参入者を中心とする有機農業者の実践について、筆者が実施したアンケート調査の分析をつうじてその多様性を明らかにし、類型化を試みた。

有機農業者の特質として、次の2点が明らかとなった。ひとつは、新規参入者が段階的なプロセスをつうじて就農時に発生する参入障壁の緩和している。もうひとつは、有機農業者が「生き方としての有機農業」を出発点とし、経営が安定化に向かう「ベテラン専業」、就農年数が浅く、経営を模索する「若手専業」と「専業志向」、兼業を積極的に維持していく「多就業志向」に分けることができた。

第5章「有機農業者の多様な実践形態と展開方向」では、第4章で類型化した有機農業者の実践のなかから、第二世代、第三世代と世代ごとに事例を取り上げ、経営スタイルの多様性を認めることができた。

このような取り組みを比較するなかで、共通点として次の2点が明らかとなった。

ひとつは、栽培技術に特徴を出した販路の構築である。購入資材に依存する経営効率性を重視する傾向が強まっている一方で、自然と共生する循環型の栽培技術をつうじた価値を理解する消費者とのつながりをつうじた販路の開拓も目指されている。もうひとつは、地域への志向性である。第二・第三世代ともに地域とのかかわりを持ちながら農業経営を展開している。そのなかでも販路の構築は、町内および周辺地域にもその広がり形成されている。

第6章「下里一区における有機農業の受容と展開」では、小川町有機農業のもうひとつの流れを形成している下里一区における集団的な転換参入の展開過程と要因について、集落のリーダー的存在である安藤郁夫（以下、「安藤」）の実践を紐解きつつ、金子の実践および社会関係の形成過程に着目しながら検討した。

金子の有機農業の取り組みが集落のなかで広がり獲得できた要因として、次の3点が明らかとなった。

1つ目は、安藤が有機農業を積極的に展開する「つなぎ役」としての役割を担った。2つ目は、安藤の「つなぎ役」としての取り組みは金子の姿勢と有機農業の実践、農業経営のなかから生まれたことである。3つ目は、むらの農業の展開という連続性のなかで有機農業が位置づけられたことである。

第7章「下里一区における転換参入の展開とその要因」では、下里機械化組合が全てを担う大豆や小麦と違い、生産から販売まで個別の対応が求められ、とくにサポート源が必要とされた水稻を有機栽培に転換した在村農業者の実践を取り上げ、技術と販路の構築という観点から、そのプロセスと要因を検討した。

下里一区における在村農業者の転換参入の要因として、次の2点が明らかとなった。

ひとつは、有機農業の技術と経済性のある販路という条件が整ったことによって、転換参入が展開し、農業生産の拡大にもつながっている。もうひとつは、担い手の世代交代によって農業の位置付けが大きく変化するなか、有機農業が展開する隙間が生じたのである。

第8章「有機農業の展開とローカル・フードシステム」では、これまで見てきた有機農業者の販路構築の現段階を整理し、その大きな特徴であるローカルな〈食と農〉の実践について加工・流通業者の側から分析した。そこでは、「地域資源の複合化」と「経営資源の共有化」をつうじて、相乗的な効果を生み出し、役割分担をしながら相互に支え合

う展開へと発展していることを明らかにした。

LFSの展開要因と有機農業の関係性として、次の2点を明らかにした。

ひとつは、有機農業の実践と考え方への共感である。提携の実践と考え方は、新しい経営のあり方や商品づくりを模索する加工業者にとって大きなヒントを与えたのである。もうひとつは、農産物、農産加工品への新たな価値づけである。有機農業は生産物に対して価値を「上乗せ」ないし「強化」し、生産物への信頼を醸成し、向上させる役割を担っている。

第9章「ローカル・フードシステムをつくるNPO」では、有機農業者とともに活動を展開するNPO法人生活工房つばさ・游（以下、「生活工房つばさ」）の取り組みに焦点を当て、LFSの形成と展開において果たす役割について検討した。

生活工房つばさが生産と消費の現場をつなぐ「コーディネーター」として、農家と企業をマッチングする「結節」機能、それを販路と交流の仕組みづくりにつなげる「調整」機能、両者の良き相談相手として関係性づくりをサポートする「緩衝」機能を担っていることを明らかにした。

第10章「総括」では、3つの課題に対して明らかにしたことを整理した。

まず、有機農業の展開過程について、小川町では先駆者である金子の姿勢、すなわち「研修生の受け入れと新規就農支援」「むら社会との対立的構造回避」「正統性の醸成」が有機農業の展開過程を規定する要因として働いていた。

続いて、有機農業の担い手の形成と展開について、霜里農場は自給や暮らしなど「個」、地域農業を守る「むら」、ネットワーク的な関係性を構築する「地域」の取り組みを同時並行的に視野に入れた展開、第二・第三世代は自給や暮らし、自己実現など「個」の充足に重きを置き、一部下里二区に居住する新規参入者は「むら」への視点も持っているが、大半は個の延長線上にネットワーク的な関係性を構築する「地域」の取り組みが展開、下里一区における転換参入は「個」の充足もあるが、それよりも社会関係的・経済的要素が強く働きながら「むら」への広がりが展開した。

このように、小川町における有機農業の現段階は有機農業の取り組みが地域全体に広がっているのではなく、多様な方向性を持った有機農業の取り組みが地域のなかで展開しているといえる。

次に、有機農産物の流通の形成と展開について、小川町では、有機農業者全体を網羅するような組織的な活動はな

く、有機農業者に「経営の自律性」が保障されている。そのなかでも、LFS の取り組みは有機農業者の多くが選択する共通の方向性として広がり形成されている。小川町では多様な方向性を持った有機農業の展開が地域のなかで見られるが、そのような取り組みをつなぐ結節点が LFS といえる。

最後に、有機農業をめぐる社会環境は大きく変化しており、多様な主体による有機農業への参入条件が整いつづめることが理解できた。

有機農業は、農業の近代化やグローバル化によって〈食と農〉の乖離が進むなか、持続可能な〈食と農〉の関係性をつくり出してきた。食の安全や健康、それらを支える農村の資源と環境がますます脅かされるなか、「持続可能性」という有機農業のポテンシャルが公共性の高い取り組みとして受け止められるのではないだろうか。

したがって、有機農業の取り組みは、「生産—流通—消費」の過程において多様な主体の参加を伴いながら、地域における〈食と農〉の結節点になり得る。有機農業の地域的展開に関する研究もまた生産者の動きだけではなく、そのような幅広い視点から捉える必要がある。